

マネジメントチーム News

令和6年6月号



第1回 地域会について

今回も地域のさまざまな課題について活発な意見交換ができました。



●高松西地域

5月20日

1. 情報提供(サポート委員日下氏より)

- ・特別支援学級、通級指導教室の現状
- ・教育と他領域との連携

2. 情報交換

- ・福祉と教育の連携について。放課後児童クラブと学校が連携をとりながら支援を行っているケースがある。
- ・5歳児健診の状態像が見えない。どのような健診スタイルにするのか、またその後のフォローはどうなるのかなど、自治体によっても異なるため、高松市がどのような取り組みとなるのか知りたい。
- ・学校と保護者とのかかわりについて、学校側は家庭での状況などについて教えてもらうことにより、教育場面でも活かすことができる。どのような内容をもとに学校とのやりとりをしたらよいのか分かりにくい。
- ・通常クラスの中に、一定数の支援が必要と感じる児童がいる。担任が35名すべての状況を捉えることは難しい為、児童が話した困ったこと等については、家庭から学校に報告してもらうとありがたい。
- ・児童同士のトラブルや困ったこと等が生じた場合は、担任のみで抱えず、学年団で共有することが多い。新任教員へのフォローとして学年主任がフォローをすることで、教員のスキル向上にも役立つとのこと。



●西讃地域

5月21日

1. 情報提供

- ・学習塾 nuco.nuco 秋山氏より
発達障害のお子さん向けの学習塾。
利用者は年長～中学3年生の20名。
- ・ひまわりルーム 林氏より
子どもの居場所。定員5名。現在利用者16名。金銭感覚や感情のコントロール等を楽しく学べる場所。

2. 情報交換

- ・知的障害の方と接していて感じるのは、子どもの頃に

支援を受けていたらもっと平穏な生活を送れたのではないかということ。

- ・子育てに関わる人の相談を受けていると、幼保こども園や学校等、関係機関と連携をする大切さを感じる。
- ・自分で選ぶことが出来ない子が居ると感じている。
- ・大人の方と関わっている中で、子どもの頃の支援は大切だと感じている。5歳児健診があれば発達障害のスクリーニングが出来るのではないかと思う。
- ・学校の先生が1年単位で異動することが多く、先生や学校との関係づくりが大変になっている。
- ・保護者が気軽に相談できる場所や支援のルートが必要と感じている。



●中讃地域

5月23日

1. 情報提供

- ・さぬきっずコムシアター 高橋氏、塚本氏より
子どももおとなも交流を深められる居場所を展開。
- ・いきいきムーン香川 高畑氏より
自助会。20～70代(メインは20～40代)、10名程の参加。居場所、暮らしのヒントや情報収集、参加者同士の繋がりを目的として参加されている方が多い。

2. 情報交換

- ・高校に入学してはじめて発達障害に気づいたケースは相談場所の情報がない。
- ・色んな活動や支援をしている所はあるが支援者同士が共有できていない状態→当事者や保護者にも届いていない可能性がある。
- ・かけはしの活用が有効だが広がっていない。
- ・保育所では子どもの発達が気になり過ぎる保護者と受け止めにくい保護者の両極端。関わりが難しい。
- ・放デイは送迎も含め必要のある人に支援が届いているのか。
- ・HSP:マイナスに捉えるのではなく良い部分もあることを伝える。HSPは環境の影響が大きい。物理的な距離感も大事。仕事では環境的な配慮が必要。

●小豆地域

5月30日

1. メンバー松村氏と篠原氏より事業の情報提供

- ・『かがわ高次脳機能障害支援センター』の事業紹介
- ・リハセンター地域交流科の居場所事業の事業紹介

2. 情報交換

<早期発見や療育について>

- ・子どもが激減している。また、健診以降ずっと悶々としていたという母親の話を聞くと、もっと早く聞いてあげていたらと思う。
- ・最近、放デイが発達障害など軽い子どもを受けて、重度の子どもが断られるという現象が起こっている。一方で、地域の学童で適応できるのではと思われる子どもが受けてもらえず、止む無く放デイを利用するということが起こっている。

<高次脳機能障害について>

- ・子どもの高次脳機能障害の例。交通事故で身体症状が回復したしばらく後に、後遺症があることに気づいたケースがある。保護者が「なんでもっと早く気づいてあげられなかったのか」と自分を責めていた。高次脳という原因要素になかなか気づいてもらえないので、本人や保護者が悩み苦しむ期間が長期化する。

<グループホームについて>

- ・不動産屋から「支援者がついている人であれば部屋を貸したい」という申し出があった。小豆ではグループホームはどうなっているか？ → 高松のグループホームを利用するケースが増えている。



●東讃地域

5月31日

1. 情報提供(さぬきポレポレ農園 松田氏より)

- ・取り組み:心理療法を用いて「自分づくり」と就職につなげ、その後定期的に職場に出向いて本人の理解を促すこと。急ぎすぎず、本人が自分で決めて行動するまで待つ。

2. 情報交換

- ・本人が安心できる居場所はどこか。早くから支援を受けている人は、人と関わることに慣れている。小さい時から人とのやり取りで、対人関係のルールを学んでいる。大人になってから、そのルールを伝えていくのは難しい。その人に合った声かけを忙しい現在の学校や家庭でできるかどうかは課題。
- ・その時はうまくいかなかったとしても、長い目で見た時に、支援が繋がりその人にとってよい支援になって

いたら良い。

- ・現代の親は自分自身が「3つ子の魂100まで」の育て方をされていない。どう母親の役割を作っていくか、保護者支援の仕掛けが必要。
- ・コロナも大きく影響し、対人関係やコミュニケーションでしんどい思いをした人は多いだろう。



●高松東地域

6月3日

1. 情報提供(サポート委員七條氏より)

- ・保護者対応の際に気をつけていること
- ・保護者の相談先について

2. 情報交換

- ・保護者の声掛けで学校と放デイが連携をとり、本人の情報共有を行うことがある。
- ・学校や事業所、保護者によって”かけはし“活用の度合いに差がある。かけはしの活用によって、最初の聞き取りの手間が省けたり他機関がどのようにかかわっているのかが分かりやすかったりする。
- ・放デイの利用日数を増やしたいという親のニーズに対し、受け入れ先の確保が難しい。既存の利用者が日数増を希望されており、新規の受け入れが難しい場合も。
- ・診断が曖昧でも、保護者が希望すれば児発や放デイを使えてしまう。しかし、児発や放デイが何をしてくれるところなのか、使用目的等が曖昧なまま利用を希望する保護者も少なくない。
- ・塾的役割や送迎を求めて放デイ利用を希望する保護者がいる。誰でも使いやすいことは良いことだが、重度の方が繋がりにくくなっているという現状がある。
- ・放デイの職員のスキルに差があると、スキルや経験のあるスタッフの負担が増加する。一定のスキルが担保できるように、研修会を義務化する等の枠組みが必要だと感じる。
- ・放課後児童クラブで発達障害がある子をどのように放デイに繋ぐか。放課後児童クラブから親に伝えると、見放されたと思われる可能性もある。
- ・過度に心配をして1歳半から療育を希望する保護者がいる。保護者に対して、療育とは何か、なぜ必要なのかを説明したうえで選択してもらう必要がある。

